

【 9 】

氏 名	水 津 一 朗
	すい づ いち ろう
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 62 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 46 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	社会集団の生活空間 —その社会地理学的研究—

論文調査委員 (主 査) 教授 織田武雄 教授 前川貞次郎 教授 池田義祐

論 文 内 容 の 要 旨

「社会集団の生活空間」と題する本論文は、社会地理学の基本問題を論じたものであり、4篇12章より成る。

第1篇「社会集団の単位空間」において、社会生活が営まれる統一的な機能体としての最小の地域単元を、著者は「基礎地域」と定義している。第1章では、基礎地域が具体的には、わが国における古代の郷や中世以降の惣村や藩政村、ヨーロッパでは古代のGauや中世のGewann 村落などに当るものとし、また基礎地域の空間規模は異なるにしても、人口規模においては、等しく300人前後を限度とするとみなしている。

一方、基礎地域の構造や機能は、それを構成する耕地や集落などの多くの要素の組み合わせによって異なるものである。従って第2章では、基礎地域と耕地および集落との関連を、ドイツや中国の事例に基づいて考察している。まずドイツについては、Esch と呼ばれる長地型紐状耕地の普遍的な原初形態をなし、それが中世に横に分筆されて、短い紐状のゲヴァン耕地が成立したというのが、Niemeier などの見解である。これに対して、著者はドイツにおける最近の研究の成果を採り入れ、エツシュ耕地の卓越する北西ドイツの主牧的な小村地帯と、短い紐状耕地をともなう中・南ドイツの主穀的な集村地帯との間には、明らかに相違することを指摘し、肥沃なレス層地帯を中心に古くから居住のみられた中・南ドイツでは、最初は長短さまざまな耕地が小村や散村と結合して散在していたが、中世における大型犁と三圃農法の導入によって、共同経営により適応した短い紐状耕地が集落の集村化現象にともなってあらわれ、ゲヴァン耕地の成立をもたらしたという新しい解釈を示している。また中国については、早くから労働集約的な畑作農業の営まれた古代華北では、方格地割が支配的であったことを、溝渠や耕地の尺度に関する史料に基づいて論証し、さらに一筆耕地は紐状耕地の形態をなすが、周から漢代へと鉄製農具の普及や在来の耒耜耕から牛馬耕への発展にともなって、それが長大化したものと論じている。

しかし基礎地域の農地は、一筆耕地がある程度集合した区画を、わが国では小字、ヨーロッパでは耕区

(ドイツの *Gewann*, イギリスの *Furlong*, スウェーデンの *deld*) と称するが、第3章では、小字や耕区が基礎地域の統一のためにどのような機能を果しているかを考察している。著者によれば、小字や耕区は本来、開拓の単位であったが、水田耕作の営まれるわが国では小字は用水管理の単位として、またヨーロッパでは耕区は保有地配分と休閑放牧を伴う混合農業経営のための単位として、それぞれ機能したことを多くの例証を挙げて究明している。このように基礎地域の構造や機能には場所ごとのちがいが存することから、第4章では村落共同体に関する諸説を批判し、社会地理学の立場から、村落共同体の多系的な発展を主張している。

以上は、最小の社会集団としての基礎地域についての考察であるが、これをさらに巨視的にみれば、現実の地表は、基礎地域の単純なモザイク状の集合体ではなく、大小の社会集団の地域が重層的に重なり合い、かつ地域結合の結節点としての中心集落(都市)の中心度に応じて、複雑な結節システム網を形成している。この観点から、第2篇「生活空間における結節システム」においては、地域的現象を体系的に把握するために、まず第1章ではChristallerなどの結節システム理論を検討し、これらの諸論に動態的な考察が含まれていないことを指摘している。従って著者は第2章では、封建的所領関係や土地制度、教区など、共通した社会的特徴を持つ地域を社会領域と称し、ドイツの *Spessart*, *Hunsrück* 地方などの諸地方について、これらの社会領域と結節システムとの間に緊密な相互関係の存することを歴史的に究明している。さらに第3章では、考察の範囲を拡大して、ドイツのライン地溝帯やチューリンゲン地方などのほかに、中国などの諸事例も加えて、古代以降における各時代の中心集落とその結節システムを復元し、歴史時代における地域的秩序とその変遷過程を詳細に解明している。また第4章では、これらの研究成果に基づいて、地域の動態モデルとして、歴史時代における各時代の結節システムの類型化を試み、それぞれの時代の中心集落と地域との配列には、時代ごとに規則的な関係がみられると論じている。

第3篇「日本における生活空間の諸問題」では、第1章においてわが国の歴史的領域の変遷について概観するとともに、明治時代の近代化にはじまる基礎地域の拡大と変質、それに対応した行政村の編成、市町村合併と地域の結節システムとの相互関係などの諸問題を考察している。さらに第2章では、阪神大都市圏を対象として、大都市の発達にともなう大規模な結節システムの成長により、古い地域的秩序が徹底的に変化しつつある状況を追求し、またその結果、社会集団の生活が地域的基盤から遊離し、さまざまな矛盾が生じている点についても述べている。

第4篇「生活空間としての地域の原理」は、言わば本論文の結論に当たるものであり、社会地理学の成立のための学説史的背景を明らかにするために、地理学における景観(*Landschaft*)と地域の両概念を比較し、機能主義の立場をとる著者は、Schlüterによって提唱された景観概念は地域の構成要素を示すに止まり、従って諸要素の複合体としての地域と結節システムの地域論的考察が、今後の社会地理学の研究にとって、重要な意義を有すると論述している。

論文審査の結果の要旨

地理学の新しい分科として、社会地理学の樹立が主張されているが、社会地理学の研究対象や研究領域については、なおかならずしも一定していない。しかし著者が本論文において、社会地理学の研究対象

は、社会集団や社会生活そのものではなく、大小の社会集団のよってたつ地表の場、すなわち社会集団の生活空間としての「地域」にありとし、これらの地域の多系的な構造や機能、およびその発展過程を考察することが、社会地理学の主要な課題とみなしているのは、社会地理学を正しく位置づけたものといえる。

以上の立場から、著者は社会地理学としての地域論の体系化を試み、いくつかの注目すべき新しい見解を提立している。なかでも著者の研究において最も高く評価し得るのは、本論文の第1篇において、最小の社会集団の地域単元を基礎地域と規定し、基礎地域の構成要素や機能について詳細に分析し、さらに第2・3篇において、地域の機能的結合を解明するための結節システム理論を、著者は古代や中世などの歴史時代に適用し、各時代の地域的秩序とその変遷過程を明らかにしているなどの諸点にあると思われる。

また著者は精緻な理論を展開するにあたって、日本・中国・ヨーロッパなど、きわめて多くの事例を挙げて実証している。ただそのため、記述がややともすれば煩瑣な感を与え、著者の論旨の理解をさまたげている点がみられるのは惜しまれる。しかしこれによって本論文の価値はなんら減ずるものではなく、著者の豊かな学識に裏付けられた幅広い研究成果は、今後の社会地理学の研究にとって、有力な基盤となるであろう。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。